

特集にあたって

藤枝平成記念病院脊髄脊椎疾患治療センター 花 北 順 哉

近代の脊椎・脊髄外科を手術手技の観点から捉えてみると、手術用顕微鏡下に行う繊細かつ正確な除圧操作を遂行し得る能力と、各種内固定器具を適切に使いこなせる力量を兼ね備えた者が最も優れた外科医であり、この両者を実施し得る所が最も優れた施設であると思う。このような外科医になるべく、また、このような施設をつくり上げるべく日々努めてはきたが、「いまだ道遠し」の感が強い。

今回の特集では、この要求される2つの課題のうち、後者の脊椎固定術を取り上げた。側弯症を対象に開発された内固定器具による脊柱矯正固定術は、その後、外傷・腫瘍症例のみならず、脊椎変性疾患に対しても順次適応が広げられてきた。今日では脊椎手術の重要な手技となっており、その手術成績もかなりの程度、満足のいくものとなってきている。しかしながら、今回の特集で取り上げたテーマは「いわゆる一筋縄ではいかない」さまざまな病態を有する患者群に対する脊椎固定術である。その背景となる病態としては「透析患者」「骨粗鬆症」「脳性麻痺・Parkinson 病」「関節リウマチ」「DISH/ASH」「小児・ダウン症候群」である。

今回執筆して下さった著者たちは、これらの困難な病態を背負った患者たちに長年にわたって熱心に取り組んでこられ、今なおさまざまな工夫を重ねながら奮闘しておられる方々である。今回の特集では華々しい成果のみならず、つらい経験も正直に各所で記載されており、「must」「must not」がぎっしりと詰まった読み応えのある論文集となっている。これらの病態を有する患者に対する脊椎固定術は今後も固定器具のさらなる改良や基礎病変に対するより根本的な治療法の開発などのさまざまな工夫により、その手術成績はより良好なものとなることが期待される。

今回で本誌の編集委員を退任することとなったが、最後にこのような今後いっそうの取り組みが必要な分野における治療の現況を概観することができた。優れた論文を書いていただいた筆者の方々に厚く御礼申し上げるとともに、読者諸氏がこれらの症例に遭遇された場合に本誌で述べられた事柄が役立つことを願っている。